第３回和泉市学力向上検討懇話会　議事録＜要旨＞

開催日時	令和４年６月２３日（木） 17 時～18 時 10 分	開催場所	和泉市役所　３階庁議室
出席者	＜外部有識者＞ 樋渡　啓祐　　（前　佐賀県武雄市長） 小宮山　利恵子（東京学芸大大学院准教授） ＜和泉市＞ 小川　秀幸（教育長:座長） 藤原　安次（教育委員） 中西　正人（教育委員） 森吉　豊　（副市長） ＜事務局＞ 並木　敏昭（教育次長） 上田　茂幸（教育指導監） 阪下　誠　（学校教育室長） 隅埜　哲弥（教育センター所長） 古川　ルミ（教育センター参事）		
議事録 ＜要旨＞	1. 開会 2. あいさつ ＜小川座長＞ 1回目、2回目は本市の現状、課題に加えてICTの包括的活用に向けた貴重な意見をいただいた。3回目の本日は、今後の具体的な施策展開について議論いただきたい。 3. 第2回懇話会の振り返り （1）第2回の要点報告 ＜隅埜所長＞ ①　成績の 2 極化から、これまでと同じような手立てではなく、対象となる層に応じたそれぞれの手立てが必要。 ②　学校規模や地域特性に違いがあるなか、ICT 活用により学力格差の平準化が図れる。 ③　反転学習の考え方について ④　学力向上に関し、家庭学習の取組みによる効果が大きく、テクノロジーの導入だけではカバーしきれない一面があることから、保護者向けの研修を実施する必要がある。これは不登校支援にもつながる。 ⑤　生活背景が厳しい子どもたちには、子ども食堂等の場を活かした学習指導が必要。 ⑥　GIGA 端末を学童保育に持ち込み活用することは、魅力的なソフトがあればゲーム感覚で取り組むことができる。 ⑦　家庭での学習支援は愛着課題の支援とセットであり、不登校支援にもつながる。 ⑧　家庭学習の取組みをどう支えるか、特に低学年のうちに親と子どもが一緒に学ぶ機会を確保することが望ましい。家庭機能の脆弱さを補完するためには、SSW や、学生サポーターの有効活用が必要。 ⑨　いずみ希望塾における令和 5 年度以降の ICT の有効活用の検討が必要。 ⑩　校外での放課後学習支援事業にデジタル教材を活用し、そこに通う子どもの学習状況		

	を把握するとともに、スタディログを有効活用すること。 ⑪　学校ごとの数値結果の取扱いにおいて、本市立学校の規模や地域特性を考慮したデータ分析が必要。 ⑫　家庭の経済的背景と学力の相関関係から、効果をあげている市の取組みについて ⑬　今年度導入するデジタル採点システムの有効性には限りがあることを前提とし、ICTを活用したデジタライゼーションへの変革が重要。 ＜小川座長＞ 本市の状況を確認いただくため、事務局より説明願います。 (2)学力の2極化の現状と施策について ＜隅埜所長＞ 資料「和泉市の令和 3 年度全国学力・学習状況調査の結果における分布図」の説明 ・　市全体の結果は、国・府の結果と同様であり、ボリュームゾーンの中間層を引き上げることが重要。 ・　学校・教科別では、偏りや 2 極化など学校ごとに様々な分布がみられる。 ・　国語、算数・数学のいずれにおいても、2 極化している学校が多い。 ・　学校状況により実施目的は異なるが、アウトプットの重要性を踏まえ、140 字主張文の指導においては、昨年度から各校に取り組むように指導している。 〈小川座長〉 小宮山氏に学校を視察していただいたので、感想や助言等を頂きたい。 〈小宮山氏〉 5校を拝見した。地域ごとに特性があるということで、和泉市内のある地域では思っていた以上に教育環境がいいと思った。現状で十分ととらえず、何か一つでも二つでもヒントを与えれば、もっと伸びる可能性があると感じた。一方で、ある地域では学力面で手を打たないと改善が難しく、一つの教室において勉強に熱心に取り組む子もいれば、全く授業に集中できていない様子が見受けられた。具体的には教室の外に出る生徒や、先生と友だちのように会話している生徒（学校外での友達同士の会話の延長線上にあるような会話）、私が教室を見学すると授業中にも関わらず手を振って応える生徒の様子を見かけ、今後の学力向上策については、かなり対策を練っていかなければいけないと感じた。後の議論になってくると思うが、秋頃に市としてAIを使ったソフトが導入されると聞いたが、それを徹底して使っていくかどうかが大きな課題になるのではないかと思う。それとともに、愛着課題を有する地域では、福祉とともに取り組んでいく必要があると考える。以前、武雄市で ICT を推進されたときにモデル校を設置されたと聞いている。それを実践したほうがいいと思う。 〈樋渡氏〉 小宮山氏の意見では、自治体として AI を一斉に導入すると逆効果になるということか、それともきめ細かく学校の状況に応じて導入すれば効果があるということなのか。 〈小宮山氏〉 学校ごとに学力の差があり、先生方がテクノロジー活用にたけているかどうかにも関わる。 きめ細かく、学級単位や子ども個人の単位でどのくらい使うかを見ていった方がいい。ただ、

	A 校はクラスとして授業成立はしているが、効果的な ICT 活用面としては、B 校とは全く雰囲気が違う。そういう学校で AI ドリル教材の活用を子どもに促しても、誰もやらないと思う。子ども自身が ICT の効果的な活用方法がわからないので、他のものに興味がうつると考える。 〈樋渡氏〉 武雄市内で12校のうち、2校を ICT 活用モデル校に指定した。モデル校として重点配置し、順次 2 校、6 校、8 校、12校というふうに、あらゆる施策において取組みを拡大していった。それにより、時間は要するが、結果的には成果を出すことができた。ただしマンモス校をモデル校に指定することは、効果検証を踏まえると適さない面があると考える。 4. 学力向上に資する民間活用等について 〈小川座長〉 この件に関しては、小宮山氏と樋渡氏の発言は共通していると考える。本年度、来年度に向けた施策展開の案を、この後お示しするので、その部分で具体的に議論することでよろしいか。前回の懇話会の最後にもふれさせていただいたが、「社会や民間の力を活用した教育」について意見交換したいと考える。そこで樋渡氏には、各論の施策の前に「はなまる学園」等の取組実績をご報告して頂きたい。 〈樋渡氏〉 （武雄市の取組資料を用い説明） ・ 武雄市は進化をしており、GIGAスクールも本番に入り、学ぶ環境を問わない活用方法になっている。 ・ モバイルルーターの貸与、端末の持ち帰り、武雄市反転授業のスマイル学習の推進、学習用デジタル教科書の導入とともに、全家庭でネット利用ができる。 ・ 学習の効率化については、タブレットを活用し子どもに習熟を図っている。 ・ 保護者説明会を丁寧に実施。 ・ 水害やコロナ対応も行う中、家庭とのネット環境を整え普通にオンラインで授業を実施。 ・ オンライン授業を踏まえて授業改善を実施。 ・ 武雄市が一番めざしていることは、PC 操作スキルを向上させるということ。 ・ 和泉市は、全国学力・学習状況調査の自校採点実施や、ICT の有効活用に取り組むと聞いたが、武雄市内ではタイピングコンテストを実施しており、楽しみながら競わせるということ、子どもの活躍場面の創出を実施している。繰り返しこの取組みを行うと武雄市長が言っていた。 ・ タイピングコンテストの取組みは、子どもが非常に盛り上がっており、子どもたち同士が楽しみ競いあいながらタイピングが早くなるということで、ここまで進化した。 ・ ICT 教育は、インプットとアウトプットの視点でテクノロジーを活用することが必要で、インプットは教材道具の使用、ネット検索、デジタル教科書で指導をする。アウトプットはアンケート、小テスト、ドリル、プログラミングなど。また、クラウドを活用すればパソコンが壊れても大丈夫。 ・ スマイル学習は反転学習のことだが、反も転も言葉が悪いということから、スマイルにした。 ・ 学校は学びの場の主体であり、学校で学んだことを理解できていない子どもが、家で理解することはできない。そのため、まず家庭において学習内容について理解する、学習を見通すためにタブレットを用いて徹底することが大切である。それを踏まえ、既習事項で分からなかったところに重きをおき、学校で学びあう、考えあう、協働する。その中でまとめる、振り返る、発展させて補充し、そこで子どもに自信をつけさせ、家庭において個

	に応じた学びをするということ。 ・ 学びに時間がかかるという子どもたちにとっても、こうした流れで取り組むことで、学びが楽しいと言っており、分かるという喜びを保護者に伝えている。 ・ 武雄市は保護者に対して、ICTの重要性を伝えている。 ・ 武雄市はプログラミング教育に力を注いでいる。プログラミング教育活用ロボットでおなじみの「ペッパー君」等を用いるなど、民間企業と提携している。 ・ 企業主催の色々な全国コンテストを、市ならびに教育委員会が積極的に応援することにより、ICT は使うだけでのものではなく、その作り手にもなれるということから、とても盛り上がっている。 ・ タブレットは教科によって適しているかどうかがある。タブレットはプログラミング教育に適していると武雄市長が言われていた。発達障がいの子どもにとっては、プログラミング教育に興味を示すことが多いようである。その子どもたちは、いじめ被害の対象から、プログラミングの取組みにおいては、他の子どもからの憧れの的、スターの対象になっている。このような事例を生み出せることが、市長として嬉しいということを、和泉市のみなさまにぜひ伝えてほしいと言われましたのでお伝えしておく。 ・ 「はなまる塾」の取組みも、今申し上げたものと完全にリンクしている。「はなまる塾」は中身の問題であり、手法を含め車の両輪のように、取組みが合致しているということである。そこが、今はうまくかみ合っている。 5. 学力向上に資する今後の展開案について 〈小川座長〉 今までの皆様からのご意見や武雄市の取組例も踏まえ、事務局の方で具体的な施策展開の案を作成するよう指示したので、ご覧願う。予算を伴わなくてもよい施策、補正対応で今年度内に新たな予算が必要な施策、次年度以降に新たな予算を伴う施策、今年度予算は確保済みで、今後プロポーザル等を実施し事業内容を確定させる施策、この4種類に分類した。これらについて、それぞれ時間を確保しご意見を頂きたい。 1点目の予算を伴わない施策は、私の決意表明でもある。 前回、森吉副市長から、大阪府内でも経済的に上位とはいえない市であっても、学力上位に成果をあげている市はないかということで、際立って結果を数年出している市があった。 10年前は和泉市と同レベルであったが、現在は全国平均を例年上回っている。そこで、事務局職員を視察に行かせた。本市もその市と同様、小中一貫教育や民間を活用した「校外での放課後学習支援事業」なども実施している。全国学力・学習状況調査の自校採点も今年度から全校で取り組んでいるが、本市では結果が伴っていない。結果を出している市は、その徹底度合が本市とは違う。例えば、本市では4月の全国学力・学習状況調査を自校採点はしているものの、7月に国から結果が送付されるまで、具体的には対応を示せていない。効果をあげている他市の場合は、自校採点をしたその点数をもって、校長面談、評価育成システムを実施している。そのうえで、具体的な人的措置や支援に結びつくようにしている。また、本市教育センターでも実施している STF プロジェクトチーム等の活用においては、効果をあげている他市では、様々な取組みの担当者が学力向上支援員（元・校長）等と一緒になって、全学校訪問を実施するなど、取組みが一貫しパッケージになっている。一方、本市では学力向上に関するそれぞれの取組みが、縦割りであり、一つにまとまっていない部分があった。今後は、一貫してシャープに実施すれば成果は出ると思う。この点について、何かご助言頂きたい。 〈樋渡氏〉 TTP という言葉が好きである。TTP は徹底的にパクる（真似る）という意味である。成果をあげ

	ている他市があるならば、その取組みをそっくりそのまま真似ればいいと思う。それは行政ならではの良さでもある。武雄市も他の自治体から相当真似をされている。私は「守・破・離」という言葉が好きだ。守は見直す、破は改良する、離は飛び越すということである。多くの自治体では、離ばかりをやっており、足元が揺らいでいると思う。 〈小宮山氏〉 大阪府内で、成功している市にも学力の偏在などがあると思う。その偏在については、すでに、可視化されている部分もあるので実証する必要がないと思う。 〈藤原教育委員〉 結果を出している市では、教育委員会と市長部局が一緒になって、色々なことを前向きにやっている。所得水準が同程度の府内の市の中では抜きん出ている。 〈小川座長〉 今年度、新たに実施する施策というところで各論に入り、そこで具体にご意見を頂戴したい。 〈隅埜所長〉 今年度内に新たに予算が必要な施策案 ・ 市内1中学校の１つの学年を拠点研究校に位置づけ、今後の展開を見据えた英語教材および授業と生徒のマッチングに関する共同研究。 ・ 現在は市内 4 中学校で共同研究を実施しているが、拠点研究校においては AI 英語学習システムの活用を継続し、授業改善の推進、今後の水平展開をめざし予算化対応を検討する。 ここで、すでに活用している AI 英語学習システムについて2分程度の説明動画をご覧いただきたい。 【動画視聴】 教員が生徒の学習状況や学習理解度を把握するための実証実験として、スライド写真は端末を用い「リアクションボタンシステム」を使った中学校での英語の授業風景である。「PUSH」の表示の上に「1」と表示があるのは、授業の中で理解できたときに生徒がリアクションした回数を可視化し、生徒と教員の行動変化を記録、授業改善にいかすものである。 次年度以降、新たに予算を伴う施策案 ・ 全ての児童生徒を対象とした家庭における個別最適な学習支援として、1人1台学習用 PC の効果的な活用 ・ AI ドリル活用にあたっては保護者への働きかけを実施する。 ここでも、希望する学校が、先行活用している AI ドリルの2分程度の説明動画をご覧いただきたい。 【動画視聴】 この AI ドリルについては、今年度は試行期間のため予算化の必要はないが、次年度以降は実証実験を踏まえ導入について検討する必要がある。

	〈小川座長〉 英語のAIドリルに関しては、現在 4 つの中学校でモデル実施している。今年度後半には予算が伴う事になってくるので、補正対応の提案も検討したいと思っている。後半の 5 教科対応型 AI ドリルは、全校対象に現在無料で実施している。来年度以降も継続するには予算が必要ということである。 〈小宮山氏〉 1つめの英語 AI ドリルについてですが、5教科対応 AI ドリルにも英語はある。今、取り組んでおられるものは、英語に特化されたものだと思うが、同時並行で両方の AI ドリルを導入される学校があるということか。 〈上田教育指導監〉 共同研究実施校は、今使っている英語 AI ドリルを継続使用する予定。 〈小宮山氏〉 他のところは5教科対応 AI ドリルで実施するのか。 〈樋渡氏〉 5教科対応 AI ドリルに統一したほうがいいのではないか。 〈小宮山氏〉 2つの AI ドリルを併用するのは、学校現場が混乱すると思われる。折角データとして得られるものが、共同研究実施校だけは違う英語のアプリのデータで、あとは5教科対応 AI ドリルのデータとなると活用や分析で不都合が起こりうるのではないか。5教科対応 AI ドリルを導入するのであれば、それに統一した方がいいと思う。 〈樋渡氏〉 加えて教員が異動したときに、弊害が起きてしまうと思う。5教科対応 AI ドリルに英語があるのであれば、多少デメリットがあるとしても一元化すべきだと思う。これは、小宮山氏と同じ考えである。 〈上田教育指導監〉 5教科対応 AI ドリルの活用としては、武雄市の紹介の時もタイピングコンテストに取り組んでおられていたと思うが、本市でも早速この夏休みに5教科対応 AI ドリルを使い、コンテストを実施予定である。先行5校の学校については、5教科対応 AI ドリルの研修を既に受講し、実際に7月から活用できる状況にある。次回8月３日のこの会議の時には、夏休み中に5教科対応 AI ドリルをこんな風に活用していると、皆様にお伝えできればと思っている。 〈樋渡氏〉 ICT は先生次第である。先生が ICT にたけていないと、子どもたちに良い影響を与えることが難しい。

	〈小川座長〉 現場でも子どもたちに引っ張られて教員がパソコンに向かっているという事例がある。 〈中西教育委員〉 大学でも、最近学生の基礎学力の低下が問題になっており、学力格差の克服に向け、この施策案と非常に似た仕組みを、大学生向けに今年から導入している。それを授業で実施する場面と、それぞれの個別学習として活用する場面について、どのようにつなげて実施するかの仕組み作りを模索しているところである。 〈小川座長〉 5教科対応 AIドリルを活用し、東京都の麹町中学校で学び方の改革を行った工藤勇一校長は、今、私学の校長をなさっているが、学校の当たり前をやめたという事で有名で発想の転換というところは参考になる。ICT 活用について他にご意見が無ければ次の施策案について、事務局より説明願う。 〈隅埜所長〉 予算確保済みで改善する施策案 校外での放課後学習支援事業である、いずみ希望塾の今後の事業改善について ・ 今後3年間の事業者選定にあたり、現在の集合型から、オンラインを取り入れたハイブリッド型へと変更し、定員を420名から850名程度に増員する。 ・ いずみ希望塾で学ぶ際には習熟度別グループ編成を可能にする。 ・ テスト回数の増加、成績結果や学習履歴について、デジタル端末を活用して保護者と共有する。 などについて見直しを行う。 〈小宮山氏〉 現在の委託業者との契約はいつまでか。ここでも5教科対応 AI ドリルを利用した方がいいと思う。 〈小川座長〉 3年契約で本年度終了である。来年度からの3年分の予算は既に獲得しており、事業内容を含め事業者選定などは今年の夏くらいから始め、年内くらいに決定予定である。ここでご意見を伺いたいが、既に予算を確保しているので、事業内容がどこまで変更できるのかについては考慮する必要がある。 〈樋渡氏〉 実施主体として委託業者はどこでもいいと思うが、5教科対応 AI ドリルを使うのなら、全ての学校において一貫して5教科対応 AIドリルを活用しないと、おそらく子どもたちが混乱すると思われる。授業で分からないところをいずみ希望塾で補完するといったものが、あるべき形であると思う。事業内容は可能な範囲で途中でも変えたらいいと思う。5教科対応 AIドリルを導入した時点で変えていくのが筋だと思う。

	〈小宮山氏〉 現在のいずみ希望塾は委託業者が運営主体で、委託業者のコンテンツを使われているという理解でよろしいか。 〈上田教育指導監〉 現在、いずみ希望塾は、公共施設6会場を活用し、共通テキストを購入して、参加している児童生徒が会場で学び、理解できない分野について、5人または6人の生徒に対して1人の先生が教えるという形態で実施している。年間 2 回のテストで効果測定を実施。そのことから、子どもたちの学力を更に伸ばす為には、事業内容を改善する必要があることから、事業者選定も含め見直す必要があると考える。 〈藤原教育委員〉 今までは、家庭でほとんど学習しない子どもたちに対し、学習習慣をつけることを一番の目的に実施してきたと考えている。今後はそうではなく、実際に習熟度をあげることに転換するということをめざしているのか。 〈上田教育指導監〉 習熟度をあげることをめざすとともに、いずみ希望塾の実施目的としては、いわゆる経済的に困窮している世帯の子どもたちに対する学力保障事業であるという面を含んだ事業である。 〈小川座長〉 いずみ希望塾の実施手法として、本市では1人1台学習用 PC を全児童生徒に対して持ち帰りも可能としているので、今後は、それも活用することを考えている。 〈隅埜所長〉 予算確保済みで改善する施策案の2つ目について ・ 対象を「すべての児童生徒」とし、学習・生活状況等の情報一元化をみすえたシステム更新。 ・ 校務支援システムの機能向上を図り、全ての子どもの個人データを分析・活用をしやすくすることによって、指導に活かすシステムを整備。 スライドに示したこの様式は、校務支援システムとして既に活用しているものである。 ・ 学級ボードでは児童生徒の様々な情報管理を行っている。 ・ 次年度のシステム更新にむけ、成績データなどをより効果的に分析・活用ができるとともに、基本情報の一元管理をめざす。 〈小川座長〉 この施策案も既に予算獲得しており、あとはどれだけカスタマイズできるか、どこまで予算の範囲内で改善できるかどうかだが、児童生徒の成績のみならず、色々な情報を一元管理することは有効と考える。これについての意見を求めたい。

	〈小宮山氏〉 現在の校務支援システムは、保護者との連絡でアプリ等を使って、スマホでできるのか。 〈上田教育指導監〉 現在はできない。来年度以降に導入を検討していく。保護者からの出欠連絡が校務支援システムに直接入れば、先生がこれを見るだけで欠席の状況が分かるようになり、業務の効率化に直結すると考えている。 〈小宮山氏〉 保護者からの出欠連絡でアプリを導入している学校に伺ったときに、導入前は朝の電話連絡などの対応が大変で、そのアプリを導入した後は、かなり先生方の業務として、本来の教育活動に時間をさけるようになったとおっしゃっていた。 〈小川座長〉 現在は、学校独自に出欠確認アプリをそれぞれ入れている状況である。今後、全校の校務支援システムにリンクさせようと検討しているが、更新のための予算は決定しているため、その範囲内でどれだけ改善できるか、今後は業者選定や契約事務にかかってくると思われる。 ここまで、皆様から様々な観点から意見を聴取してきたが、今回提示した事務局からの施策展開案以外で、本市として、こんなことも行えば効果的ではないかというようなご意見があればお伺いしたい。 〈中西教育委員〉 重点施策展開として色々な提案があるが、樋渡氏が効果をあげている他市の施策を徹底的に真似るというお話をされたことに賛同する。一方、取組み事項として、モジュール授業の実施があげられていたが、モジュールの取組みには色々なパターンがあり、十数年来、大阪府もモジュールの取組みに力を入れて実施している。しかし、成功事例等が形骸化している状況もあるのではないかと懸念している。そこで、成功事例を参考にし、さらに効果的なモジュール授業とする知恵を出さないといけないと考えている。単純に朝読書をするとかではなく、短い時間をいかに有効利用できるか、そこの知恵がいるのではないか。 〈小川座長〉 さらに効果的なモジュール授業の実施に向けては、本市においても検討している。 何でもかんでも、毎日、国・数・社・理・英と日々取組み手法を変えても結局効果が得られにくい。継続して実施することが大切である。 〈中西教育委員〉 子どもたちの能力を上げるために、どういうモジュール授業を実施するのか、学校の実情に応じた工夫を行うことが大切である。 〈森吉副市長〉 皆様から、施策展開案に対して色々とご意見、ご紹介があったところに、本市として今後予算を投入していくのだが、この施策を上手に運用、活用し、学力向上の結果を出していかな

	いと何もならないと思っている。小宮山氏から先ほどもお話があったが、愛着課題の克服というところで、ひとり親家庭での課題解決等、市長部局の福祉との連携が大切になる。学力向上を図るにあたっては、家庭の理解は欠かせないと思っている。前回、樋渡氏より、図書館で夜の9時台から保護者を呼んで繰り返し説明を続けていたということから、そういう市としての取組みがあってこそ、活きてくるのではないかと思う。学力向上の取組みは、その仕組みをセットで考えていかなければいけない。ここについては、教育委員会だけでは達成できるとは思っておらず、市長部局、福祉等と連携し実施したいと思っている。その点でご意見を頂きたい。 〈小宮山氏〉 これも他の自治体の取組事例がたくさんある。武雄市もそうだが、他にも複数の自治体の取組みがある。その中から和泉市にマッチする取組みを真似るのが良いと考える。 〈小川座長〉 真似ることから派生し、新たな取組みへと深化する「和泉発日本」としていきたいと考える。 次回は最終回である。 この学力向上検討懇話会での意見を確認しながら、教育委員会議、総合教育会議につなげていく最終回にしたいと思っている。 〈古川〉 次回の懇話会は8月3日（水）の 15時00分から、市役所 3 階の庁議室にて開催予定。